第４回学校環境適正化検討委員会会議録

一、日　時　令和５年２月２８日（火）　午後３時００分～午後４時３０分
一、場　所　金浦公民館　２階　軽運動室
一、出席者　本間　徳之、伊藤　和明、石船　清隆、佐藤　健、佐藤　真二郎
武内　隆之、佐藤　緑、宮崎　絵理、伊藤　兼壽、佐藤　佑介
大須賀　博、阿部　道、村上　道夫、竹内　るり子、大橋　次雄
楢岡　一英、阿部　徳之、伊藤　剛喜、佐藤　直哉
三浦　順子、齋藤　隆
（計２１名）

一、事務局　教育次長　畠山　真姫子
教育総務課長　今野　和彦、学校教育課長　菱刈　宏記、
教育総務班　班長　佐々木　真紀子、主査　齊藤　沙織、
主任　竹屋　昭宏

●佐々木班長　ただいまより、第４回学校環境適正化検討委員会を開会します。さっそく、次第の２　案件に入ります。ここからの進行は大橋委員長にお願いします。

●大橋委員長　皆様よろしくお願いいたします。それでは案件に入ります。
１）小中学校の現状についてです。３校の校長先生からお話をいただきたいと思います。はじめに、金浦小学校の伊藤校長先生お願いします。

●伊藤校長　金浦小学校の現状についてご説明します。本年度２月現在児童数は、１年生２２名、２年生２３名、３年生２４名、４年生２４名、５年２７名、６年２６名、計１４６名です。ＰＴＡ世帯数は１１１世帯となっています。にかほ市内の小学校の中では新しく見える校舎ではありますが、現在の場所に校舎新築移転となったのは平成１６年ですので、もう１９年目になろうとしています。その当時の児童数が２５２名ですから、それ以来１００名余りの減少となっています。小規模校のメリット、デメリットについてはこれまでにたくさん挙げられてきていますし、本校もそういった一般的傾向がほぼ当てはまると考えておりますので、ここでは割愛します。

現状の児童の実態に関わることをいくつかお話しします。まず学習面ですが、１２月実施の秋田県学習状況調査の結果、５年生、６年生の国語が県平均より同等以下であるほかは、全て県平均を上回ることが出来ました。特に社会、算数、理科は、全て県平均を大きく上回っていてその中でも、４年生、６年生の理科や、５年生の社会、算数などが良い結果でありました。各学年ともおおむね良好な結果だったと捉えておりますが、児童の個々の実態に応じて、年度内に補充学習等での改善を進めているところです。

また、質問紙調査において、対象の４、５、６年生を均して全県平均と比較すると、「勉強が好きだ」、「学校の勉強が良くわかる」、「平日の学習時間が１時間以上」の項目全てが全県平均を上回っております。学年別にみると、どの項目も４，５年生が県平均を大きく上回っていて、６年生が平均並みか、やや下回る項目もあるという状況でした。４月の全国学力調査においても、読解力に大きな課題がみられておりましたので、そういう実態を職員で共有し、改善・向上できるように進めてきたこの１年でした。ただ、学年別にしてしまうと、母集団がもともと小人数である本校のような規模においては、県平均や全国平均との差異に必要以上に一喜一憂すべきではないことも職員間で共有しております。平均ではなく、個々の達成状況に目を向けて、一人ひとりの成長を目指すことが何よりも重要である、という考えで教育活動を進めてまいりました。

次に生活面、心の成長を目指すということについてですが、７月、１２月に行った、校訓「共生・自主・挑戦」に関する児童アンケートについてお話しします。こちらは、母集団が全校児童になりますので、ある程度の傾向は見えると考えております。よくできている、まあまあできている、を肯定的回答として捉え、その割合と合計値の推移を見ましたが、肯定的回答の合計値はすべての項目で８０％以上、その内多くは９０％以上と、全項目で高い水準を維持し、加えて、全ての項目で１回目の数字よりも２回目の数字がアップし、２回目は全９項目が８５％以上で、内７項目は９０％以上という好ましい結果でありました。そして、特にこの２年こだわってきた、最上位段階「よくできている」と自信をもって回答できる子を増やしていく、ということに関しても、全ての項目で「よくできている」と回答した児童が１回目よりも２回目の方が多くなっており、その２回目においては、半分以上の項目で７０％以上でした。もちろん、子どもの自己評価ですので個人差もあり、普段の様子からすると本当にそんなのでいいのか、と感じられる部分もなくはないのですが、実際の行動はそれぞれであっても、少なくとも子ども達の気持ちとしては頑張っている、これらの姿を目指すことを意識して頑張ろうとしている、ということは表れているものと捉えております。

最後に、コロナ禍の３年、全国的にはもはや行動制限もなく、取り巻く環境や条件、マスク着用に関することなども緩和の方向に向かっていますし、５月連休

明けに新型コロナの５類引き下げも示されております。しかし、学校という場を考えると、劇的な変化の難しさももちろんあり、次年度以降も模索し続ける状況が続くのかなとも思っています。そういった学校という場への理解や行事なども、元に戻すという方向性ばかりでなく、新しい視点での行事等を作り上げていくという方向性などを、地域や保護者と共有しながら進めていくのが、新年度以降の一番の課題になるのかなと思っているところです。以上で本校の状況に関するお話を終わります。

●大橋委員長　ありがとうございました。続きまして、平沢小学校の大須賀校長先生お願いします。

●大須賀校長　平沢小学校の現状について話をします。最初は、児童数の減少についてです。にかほ市学校環境適正化に関する提言（案）３ページをご覧ください。上段、小学校の規模の平沢小学校の欄で、Ｈ３０、Ｒ４、Ｒ１０、Ｒ１２、Ｒ１７があります。数年間隔で見ると右肩下がりになっておりますが、１年ずつ見ていくと、必ずしも毎年減っているわけではありません。例えば、令和２年度の全校児童は２８９名でしたが、令和３年度は５名増の２９４名となりました。そして今年は、さらに７名増の３０１名で、久しぶりに３００人の大台に乗ったところです。このように平沢小学校は、地域柄、企業に勤める家族が多いということもあって、出入りも激しいことから、増減しながら徐々に減っているというような傾向のある学校です。そして残念なことに、来年度は２０人も減ってしまいまして、２８０人台となります。こういった傾向がありますので、この規模なのにスポ少の単独チームを組めないところも出てきました。この秋から、野球はＮＫスピリッツという、院内小と金浦小の合同チームに混ざることになっております。それから、女子ミニバスも平沢単独でできず、院内小の女子ミニバスに混ざり合同チームとなっています。平沢の規模で単独チームが組めないことは寂しい限りです。

２つ目は、１学級当たりの人数について話をします。平沢小学校で一番人数の多い学級は３７人です。これは４年生で、人数が少ないために、１クラスしかないため３７人となっています。もう４人いれば２クラスになります。そして、一番少ないのは１、２、３年生で、大体２５人程度です。３７人と２５人ですから、パッと見ただけで全然違います。毎日授業を一巡しているのですが、４年生の３７人というと、じっと見ても全員の様子を見るのにしばらくかかります。しかし、１、２、３年生の２５人程度だと、パッと見れば、この子は集中していないな、この子は活き活きとしているな、というのがすぐにわかります。ですから、私の

感覚的には２５人よりも少ない人数の方が、学級担任としては子ども達一人ひとりを把握しやすい人数だなという印象です。

次に、平沢小学校規模による長所についてです。１学年あたりの人数が多いということは、学年全体を見渡せば気の合う子どもが必ずいる、というような印象があります。仮に友達と喧嘩しても、学年全体を見渡せば、他の子どもと新たな人間関係を築くこともできます。また、全校児童が多いということで、個性的な人が悪目立ちしない、というところも良いところだと思います。今、多様性が叫ばれていますが、そういうことを日常の学校生活の中でも学んでいけるというところが長所だと考えています。

次に平沢小学校規模における短所ですが、全校の児童数が多いと、体育館などで全校の子どもを集めて褒めてあげたり、表彰してあげたりという、脚光を浴びさせる機会を全ての子どもに保証できないところが少し残念なところです。平沢小学校の子ども達は、「自分には良いところがある」という質問に対して低い結果になっているところも、こういった活躍の場面をしっかりと学校側で与えてあげられないというところが、要因の一つになっているのではないかと分析しています。その分、各学級でも活躍の場を与えるよう取り組んでいるところです。

そして最後に、先ほども申し上げましたように、１学級の人数が多いところについては、子どもたち全員に目が届かないことがあるかもしれませんので、そういったところを学校生活サポートと協力しながら、子ども達一人ひとりを取りこぼさないようにしていかなければいけない、というのが平沢小学校の課題と捉えているところです。以上です。

●大橋委員長　ありがとうございました。続きまして、象潟中学校の村上校長先生お願いします。

●村上校長　象潟中学校の現状を、今年度と旧校舎最後の年の平成１９年度、１５年前と比較しながら、３つの視点、学校規模・通学状況・部活動数に関してお話を進めていきます。まず学校規模ですが、令和４年度は全校生徒数２０５名、来年度は１９６名で２００人を切る見込みとなっています。平成１９年度は３３９名おりました。１３０人以上減っているということであります。学級数は令和４年度では普通学級７、特別支援学級２の９学級で、１５年前は普通学級１１、特別支援学級０の１１学級でした。運動会では縦割りの応援合戦が伝統となっており、今年度は３年生の学級数に合わせて、鵬・九十九・鳥海の３軍体制で実施しましたが、来年度からは３年生の学級数が２となるために、２軍体制ということで応援合戦をやる予定になっています。少し寂しくなると考えております。

また、学年棟には普通教室が４つあるのですが、これからはどの学年も２つずつしか使わないということで、飛び飛びに空き教室ができ、そこはＴＴで使うことになっておりますが、これも寂しいと感じるところです。教員数に関しては、令和４年度は３２名となっており、内訳は教職員２２名、市職員１０名です。平成１９年度は３１名で、令和４年の方が１名多いという状況です。ただし、教職員は今よりも４名多い２６名、市職員は半分の５名でした。現在は、先生方は減っているのですが、生活学習サポートとＩＣＴ支援員５名分は増えており、市から応援をいただいているという状況です。こういった状況ですので、教職員一人当たりの仕事の負担が増えているのが現状です。

部活動のことに関して話をしますと、令和４年度は１２種類の部活動があります。人数減のため弱体化が目立ってきており、現在、優勝旗はバレー部の２本のみで、これももうすぐ返すことになるのではないかと危惧しているところです。平成１９年度には１４種類の部活動がありまして、新体操や女子卓球なども活動しておりました。令和４年度は、学校全体で陸上部員を募って地区陸上大会へ参加していました。駅伝部も全校生徒から募ってやっていますが、駅伝大会は令和元年度に象潟中学校が優勝してからは廃止となり、現在は開催しておりません。令和４年度、個人種目で中体連への参加ということで、バドミントンの象潟縁集会から３名出場しています。部活動はありませんが、こういった形で中体連の大会に参加している人もおります。それに伴って、クラブチームの活動も盛んになっておりまして、本校から、サッカーのエストレージャに１３名、ＦＣ秋田に１名の計１４名がクラブチームに入っています。現在、本校のサッカー部は１４名なので、もしこれが全て部活に入っていれば大所帯のサッカー部になるのにと思うことがあるのですが、現在はこういった状態になっています。他にもダンスをやっているのが６名、空手をやっているのが３名います。本校では野球のクラブチームに参加している生徒はおりません。ここが少し変わっている部分かと思います。

次に、通学状況に関してお話しします。本校は徒歩通学かバス通学のみで、自転車通学はいません。平成１９年度もそうではありますが、旧校舎の時代には自転車小屋があり、仁賀保高校前から自転車通学をしていた生徒が数名いたそうです。現在、自転車小屋はありません。私も興味があり、バス通学について、子ども達の実態を調査してみました。バス通学は４線あります。長岡線、小滝線はコミュニティバス。上浜線、象潟線（仁賀保高校前）は羽後交通バスを利用しています。通学定期を利用しているのが、上浜線１９名と象潟線１名です。バス乗車の実態については、長岡線１２名、小滝線９名、上浜線１２名の計３３名が乗っています。象潟線の１名は、朝はバスの都合がつかないため、親から送られてきて、帰りにバスを使うという状況です。その場合も、象潟駅から乗って仁賀保

高校前に着くということで、不便なのかなと感じております。乗車時間はどれくらいなのかと、子ども達に聞いてみたところ、長岡線は最短で長岡まで１０分、最長は水岡まで２５分。小滝線は、最短で小滝まで１５分、最長は横岡まで３０分。上浜線は、最短で建石まで５分、最長は三崎まで２０分ということでした。象潟線の場合は、象潟駅から乗って仁賀保高校前まで１５分くらいかということで、象潟中学校まで来るのに、最長３０分かかる生徒がいるということであります。これが、この後統合になった場合は、どんどん時間が伸びていってしまう可能性があるという所が危惧される面ではないかと考えているところです。以上です。

●大橋委員長　ありがとうございました。学校の現状について、ご説明いただきました。次に、２）提言書（案）の検討に入ります。提言書の内容について、事務局からお願いします。

●教育次長　それでは私の方からご挨拶もかねてご説明いたします。まずは、お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。学校の方も受験や卒業、入学の時期でお忙しい中ありがとうございます。今日は４回目の検討会ということになります。お手元に提言書の案がございますが、そちらを説明させていただきます。こちらは４回目までの経過を踏まえて作成しております。振り返りますと、１回目は児童生徒の現状に関する説明を行いました。また、見山先生による講話もいただきました。これにより、まず何よりもこの検討会では、これからの未来を担う子ども達のための環境を第一に考えようという共通認識を持つこととしました。

２回目は、アンケート結果の説明と、各学校の良さ、課題を改めて見直しました。良さについては、学校の規模適正化を進めるにあたっても、これから必要な学習環境として、この良さは取り入れていく、携えていくというようなことを肝に銘じておきたいと思っています。また、課題はきちんと共有して、解決を目指していくのだというところを載せていきたいということで、この話し合いの経緯も掲載していきます。ただ、この部分はまだ不完全なため、今後手を加えていきますのでご了承下さい。

３回目の話し合いでは、齋藤教育長から学校環境適正化を進める上での考え方についてお話をいただきました。また、改めてこれまでの情報や話し合いを参考にして、提言の骨子について意見交換を行いました。以上の状況を踏まえて、未完成の状態ではありますが、提言書の案、イメージ、こういった内容のものであるというものを、今日お配りしています。新年度４月以降は、この提言をもと

に教育委員会で今後の進め方の計画を立てることになります。今日は、皆様から色々な意見を出していただきたいと思います。よろしくお願いします。

●教育総務課長　それでは、私の方から提言書（案）についてご説明させていただきます。配布しております資料をご覧ください。表紙をめくっていただくと委員長のあいさつがあり、次のページが目次となっています。４部構成で全１６ページとなっています。ローマ数字のⅠ～Ⅳまでがそれにあたります。Ⅰ本市を取り巻く現状、Ⅱアンケート調査結果の概要、Ⅲ望ましい学校規模、そしてⅣ提言という形で構成しています。まず、Ⅰ本市を取り巻く現状ということで、１～４ページまでに児童生徒数の推移など、これまで会議で使用した資料を掲載しております。その中で、４ページの④今後の中学校１年生の数についてですが、前回配布した資料には令和１０年までしか記載しておりませんでしたが、令和１６年までの記載にしております。中学校１年生の学級数は、令和１３年までは各校１～２学級という現状の学級数を維持できますが、令和１４年に象潟中学校が１学級に、令和１６年に仁賀保中学校が１学級になるという状況です。

５～８ページにかけては、アンケート結果の一部を記載しています。８ページの２には、アンケートから読み取れる結果を簡単にまとめて記載しています。規模については、小学校で２学級以上、中学校では３学級以上の複数学級を望ましいという意見が多かったということ。また通学時間については、手段を問わず３０分程度までを望ましいとする声が多かったことなどを説明しています。

９ページからは、学校規模に関するメリット・デメリットと、本委員会での話し合いの内容を記載しています。

１１ページは、２回目の委員会で皆さんから出された、各校の良さと課題を一覧にしております。こちらについては、中学校の課題の抽出に至らないグループが多く、象潟中と仁賀保中の課題の部分は空欄にしています。

１２ページは、３回目の委員会で話し合った内容を、項目ごとに挙げております。適正化に関する考え方、学校規模、手法、実施時期、その他の区分で主だったところを記載しました。１１ページ、１２ページともに全ての意見を掲載できているわけではありませんので、その点はご了承いただきたいと思います。ただ、先ほど次長からお話があったように、特に１１ページの内容についてはもう少し修正していきたいと思います。

１３ページですが、こちらには学級数という面から、適正規模を明確にするための考え方を記載しています。文中にありますように、学校規模に起因する教育課題を解決し、より良い教育環境を実現していくためには、学校規模の標準を定め、維持していくことが重要となります。標準を維持できない学校は、是正していく必要がある、という認識をここで明確にしています。これはもちろん国の基

準があるわけですが、それを踏まえてにかほ市の児童生徒数の推移、推計を考えたときに、適正な学級規模として、小学校では１２学級以上、中学校では９学級以上を標準として目指すということを明示しました。

そして、メインとなる提言については１４ページになります。こちらは４つの項目に分類し、留意事項を加え、計５項目としています。大きな１つ目が、適正化基本方針です。方針は３つあり、（１）より良い学習環境を子ども達に提供することを最優先とすること、（２）にかほ市教育大綱を念頭に、地方創生とにかほ市の一体感を効果的に発揮できるような環境を目指すこと、（３）中長期的な視点を踏まえた計画とすること、としています。大きな２つ目は、適正化の進め方になります。これは適正化を実施するための手法や基準等について記載したものです。（１）は、前回の教育長のお話にもありましたが、将来的には市内小・中１校ずつにならざるを得ないという人口推計が示されており、それに至るまで必要な適正化を行っていきましょう、ということを記載したものです。（２）は、小規模校を解消するために、単学級（１学年１学級）であることや、複式学級の発生を解消することを一つの基準とするということです。（３）は、学校は地域コミュニティの中核であるということを重要視して、児童生徒数だけで統合をすることのないように、という意味合いになります。（２）と（３）については、内容としては矛盾しているのですが、あえて両方記載する必要があると判断し、このように記載しております。大きな３、４は小学校、中学校の適正化という項目で、具体的な進め方について記載したものです。いずれも、適正化を図るために統廃合を進めるということを第一に掲げております。そして、小・中ともに段階的に統廃合を進め、最終的には小・中１校ずつの体制に移行するという内容にしております。段階的に進めたほうがいいのか、或いは思い切って一度に統合をすべきか、これも意見が分かれるところだと思います。後程、皆さんのご意見を聞かせていただければと思います。最後に留意事項として、通学手段の確保と、統合等による心身の負担を軽減する方策を組むことの必要性を記載しています。今回提出したものは、これまでの会議の内容を事務局としてまとめたものですので、委員の皆さんから意見をいただいて、改めるべきところは改め、より確かなものにしたいと考えております。以上です。

●大橋委員長　事務局の説明が終わりました。皆さんからご質問、ご意見をお願いします。今回は、一人ずつ順番にお願いできればと思います。よろしくお願いします。

＿＿＿にかほ市学校環境適正化に関する提言（案）に対する質問・意見＿＿＿

・市内小学校、中学校各１校ずつになるという提言があったが、通学時間、交通安全のことも含めて、個人負担のないようにということを考慮し、進めていかなければならないのかなと思った。
・統合は段階的に進めたほうがいいと思う。なぜかというと、学校が地域から無くなるということは、地域コミュニティの面で大変なことだと思われるため。地域の方々からの賛同を得た上での適正化というものを、最優先で進めていかなければならないと思う。
・小学校の複式学級を解消することについては同意を得られることだと思う。しかし、それ以降に関しては、地域の意見をもっと集めないとまとまらないのではと思う。中学校に関しても、この委員会のみでは決められないと思う
・小学校、中学校は最終的に１校ずつになるという方向だと感じた。ただ、年度、学校数を明確にしてしまうと、何となく流れが見えてしまう。それよりも、最終的にこうなります、というように少し曖昧にして、長期的な計画を示して理解を得ていった方がいいと思った。
・適正化の進め方について、内容的には矛盾するが、あえて２点を挙げたということについて、まだ決定はしないが、いろいろな考え方があるのだということを感じさせてくれるものだと思った。話し合いをして進め方を探っているということが提言（案）に表れていると思う。また、一気に統合するということについて納得しない人も多くいると思うので、段階的に進めるほうがいいと思う。
・教育環境を考えると、統合については仕方がない。通学について、自然災害時の対応も考えてほしい。
・以前の委員会で、統合時に適応能力がない子がいたという話を聞いた。自分も中学校に上がるときに、少人数の学校から入ったが、負けられないという気持ちがあったからやっていけた。適応できない子たちのケアをしっかりできるように環境を整えてほしい。
・学校は地域コミュニティの中核となることから、単に生徒数や学級数をもって適正化の対象としないこと、とあるが他に何をもって決めるのか。これからの委員会で、子ども達にとってより良い環境になるように進めていきたい。
・提言（案）の内容にあるように、統合は避けられないと思いますが、各学校の持っている風土、文化が失われないように維持できればいいと思った。
・統合する学校の位置や学校名等については、地域の方々と話し合い策定するとあるが、学校名は出さなくてもいいが、早めに案内をした方がいいと思う。

・将来的に市内小学校１校、中学校１校というのは、児童数の減少を見ても仕方がない事だと思う。統合については、地域コミュニティのことを考えると段階的に進めてほしいが、予算のことを考えると、一気に進めて良いものを作った方が将来の子ども達にとってはいいのか等、色々な事を考えている。
・適正化の進め方（案）の書き方について、段階なのか、並列なのか記述の仕方をはっきりした方がいい。
・統合を段階的に進めたほうがいいという意見があるが、期間をどう設けるか考えなければいけない。地域へ説明する際にも、期間を示した方がイメージしやすい。
・人口推計からすると、市内小・中学校１校ずつを視野に入れて適正化を進めるということについては賛成。具体的な年度を明言してしまうと、それが先行して混乱を招く恐れがある。時期の表現については柔らかくした方がいいと感じた。
・統廃合により通いなれた学校がなくなることや、人数が少なくなると聞くと、マイナスな印象と捉えてしまっていたが、捉え方を変えて、統合するということをいい機会だと捉えて進めていかなければいけないと思った。マイナスなことばかり考えていると、いい案が思い浮かばないことがあるため、頭を切り替えて少ない機会である統合を進めていかなければならないと思っている。
・場所の問題、通学時間、保護者の送迎、部活の合同活動など問題が出てくると思うが、親としては、どういった形になってもそれに合わせる家庭が多いのではないかと思う。多少の苦労があっても、それに合った生活スタイルに変えていったり、少しずつでも新しいものに気持ちを合わせていくと考える。
・将来的な人数をはっきりと見せることで、最初のアンケートをまた違う気持ちで見ることが出来るのではないかと思う。
・学校に通っている子ども達に、自分たちの学校をどうしたいのか、どうだったら楽しく過ごせるのか等、聞く場があれば楽しく進められるのではないかと思う。
・統廃合は仕方がない事だと思いつつ参加している。子ども達の環境を考えると、少しでも人数が多い方が良いと考える。地域の方々との話し合いについては、数字などを明確にして丁寧に進められれば、考え方が変わる方もいるかもしれない。進め方については、少なくなったからまた統合というように、段階的に行うよりは、一気に行った方がいいと考えている。
・統廃合をすることでの変化について、学級数、生徒数以外でも目に見える形で把握したい。経済的な変化はどうなるのか気になるところ。学校が一つなくなることで、かかるお金にどれだけの変化があるのか、統合された後に教員数がどうなるのか等、そういった変化が目に見える形にした方が進めやすいと思

う。例えば、これから地域の方々と話し合う時にも、学校がコミュニティとして大事なのはわかるが、維持するのにこれだけかかるのであれば、こうした方がいい等、様々な意見が出やすくなると思う。
・中長期的というのはどれくらいの期間なのか。中期は何年、長期は何年など、明確にした方がいいと思った。
・統廃合の年度は明確に記載しても大丈夫なのか。
・どの人数になったら単学級、どの人数になったら複式学級なのか等、定義を明確に記載してあった方がわかりやすい。
・仮に統廃合の年度を明記していた場合、急に人数が増えたときの対応はどうなるのか。
・統廃合までの期間を、３年後などと短く設定した場合、地域からの賛同を得られるような説明ができるのか不安。
・提言（案）の、よりよい学習環境を子ども達に提供することを最優先とすること、ということが大前提だと思う。学校の主役は子ども達なので、子ども達の未来を考えることがこの適正化検討委員会の使命だと思う。それから、適正化の進め方の部分では、相反する内容を記載してあるが、子ども達の学習環境を最優先するならば、「単学級であることや、複式学級の発生をできるかぎり解消するように努めること」を選ぶ。
・適正化基本方針は大きなくくりでの記載となっているため、事務局として、それに対する考えを持っておくべきだと思う。

●大橋委員長　ありがとうございました。本日の案件はすべて終了しましたので、進行を事務局にお返しします。

●今野課長　皆さんありがとうございました。本日お話しいただいた内容を、提言に盛り込む形で作り直しをしていきます。

●教育次長　ありがとうございました。まだ言い足りないことがあったかと思いますので、何かあれば遠慮なくお知らせ願います。提言書（案）については、皆さんと同じような悩みを持ちながら、たたき台として作成しました。ご意見の多かった箇所については、書き方を迷っていたところで、敢えて具体的な年数を記入し、皆さんのご意見をいただいたところです。提言ですので、より良くくみ取っていただけるように、表現などを考えていきたいと思います。次回までに再度作り直していきますので、ご相談させていただくこともあるかと思いますが、よろしくお願いします。

また、前回の話し合いで強く印象に残っているお話で、ここまで子どもの数が減っているのに、今まで何をされていたのですか？ということがありました。今までの経験で、市民の皆さんに丁寧に説明することが、いかに大切かということは身に染みています。地域を大事にする気持ちもありますし、子ども達の環境が最優先ということも皆さんと同じです。保育園が同じだから同じ小学校に通いたい、しょっちゅう学校が変わるのもどうなんだというような声もあります。来年度計画を作っていく段階で、細部の検討をしながら考えていきたいと思っております。第１回目の委員会でもお話ししましたが、未来に向けて明るい会議にしていきたいので、ご協力よろしくお願いします。

●佐々木班長　ありがとうございました。それでは、次回の委員会の日程等について、事務局よりお願いします。

●教育総務課長　作り直した提言書（案）の各委員への送付は、３月中旬頃を予定しています。次回開催は３月２３日（木）午後３時を予定しています。

●佐々木班長　以上を持ちまして、第４回学校環境適正化検討委員会を終了します。